

汚染地域の異変 (2)

チェルノブイリ原発の周囲 30Km ゾーンに住民は強制的に疎開させられ、無人地帯となっています。考えれば当然の事ですが、そのためにこの中は野生動物の天国となりました。私達が 1993 年に原発を見学しにゾーンの中に入った時のことです。猛スピードで走る車の前を盛んに野兎や猪（あるいは野生化した豚）などが横切りました。野生動物にとっては人間が最もやっかいな天敵です。動物達は人間のいなくなったゾーンの中で盛んに繁殖しているようです。しかし、そこに生えている餌の植物や木の実は放射能で汚れているのです。

彼らにとって「今の豊かな生活」は実は「恐ろしい危険をはらんだ未来」を準備しているのです。

チェルノブイリ原発を見学して遅くなった私達は、真っ暗な林の中を車のライトだけを頼りに走っていました。来るときと同様、野兎が光に誘われて飛び出して来るので危なくて仕方ありません。

突然、どすん！と大きな衝撃があつて、車が止まりました。運転手さんが何やらあわてて降りていきました。私達もそれに続きます。懐中電灯の光の中には大きな鹿が倒れていました。まだひくひく動いています。

あつと云う間の出来事で、運転手さんはハンドルをきる余裕もなかったのです。本当にかわいそうなことをした、と皆言葉も出ませんでした。私はとつさにカメラのシャッターを押していました。

帰国してからの事です。出来上がった写真を見て驚きました。倒れた鹿の後足の付け根に大きな腫瘍らしき物が見えるのです。30 Km ゾーンが野生動物の天国、と思ったのは間違いでした。彼らは体の内外からの放射能による被曝で、種の存続を脅かされているのです。ゾーンでは天国と地獄が隣り合わせだったのです。原発の近くで見た、松の奇形があらためて思い出されました。どれもこれもが葉っぱが 3 本で、しかもパーマネットをかけたようにカールしていました。

(河田昌東)



腫瘍のある鹿



奇形の松葉